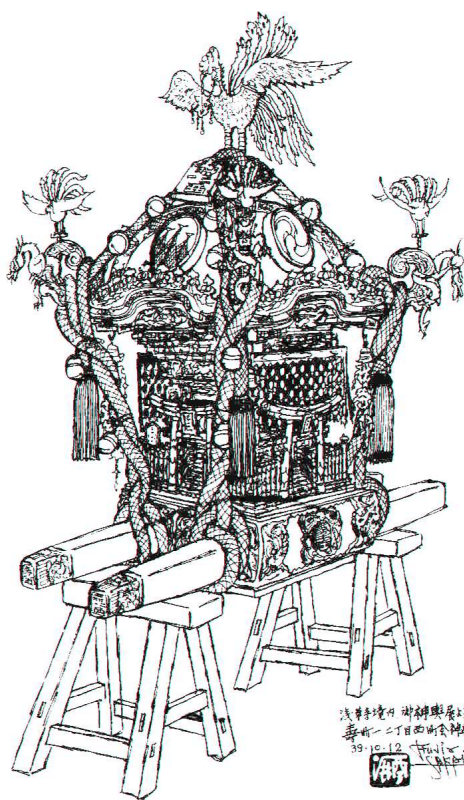


淺草走馬燈 一瀬直行

浅草走馬燈

一瀬直行



浅草寺境内 御神輿展覧
 平成一二丁目西会館前
 39.10.12 一瀬直行

燈馬走草浅

★定価はカバーに入っています。

《検印省略》

著者 一瀬直行

発行者 豊島 澈

印刷者 日本製版株式会社

発行所 株式会社光風社書店

東京都千代田区神田錦町三ノ十四
電話東京(五七)〇二三八番
振替東京812913番

乱丁・落丁は御取替いたします。

目次

あさくさ歳時記

五

浅草・今と昔

セ

新春の浅草

一六

三社祭

一九

四万六千日

二三

出水

二七

酉の市

四〇

摺半

三七

羽子板市

四三

ASA KUSA / 1931年

四七

浅草新風景

四九

浅草の飲食店

五〇

興行街

広小路の屋台店

点景

路傍芸人

賽銭泥棒

鬼門よけ

かけ茶屋

売卜者

自転車預かり所

一杯二銭のコーヒー

雨傘売り

ガセネタ

客ひき

浅草寺周辺

隅田川

吉原土手

七

八

九

十

十一

十二

十三

十四

十五

十六

十七

十八

十九

二十

二十一

二十二

山谷堀	二三
龍泉寺と千束通り	一九
吉原	二三
引手茶屋	二六
妓楼	二三
瓢箪池	二五
六区街	二四
十二階	二四
水族館そのほか	二五
木馬館の庶民劇	二七
浅草の裏通り	二六
十二階下	二五
玉の井	二六
都電二十二番線	二五

二三 二六 二五 二四 二五 二三 二六 二三 一九 二三 二五 二四 二五 二七 二六 二五 二六 二五

町の履歴書

一七

私の生れた土地

一八

町はかたる

一九

吉原の大火

二〇

関東の大地震

二一

下町の戦災

二二

路面はかたる

二三

町の戦後

二四

風呂屋の客

二五

吉影館焼失

二六

山谷の石

二七

あとがき

二八

装幀
挿画

酒井不二雄

あさくさ歳時記

浅草・今と昔

ある席でこの頃の浅草は昔と違って、斜陽の道をたどっているときいて、いささかそんなものと驚いた。やはり内側から甘えてみる目と外側からきびしくみる目の相違を感じた。みごと一本お面をとられたかたちである。

今の若い人達に浅草の情緒とか、風情ふうせいとかいっても、びんと来ない。それよりもっと直接的で、刺激的な娯楽を求めている。浅草へ来れば、ちよつと口にはいいあらわせない情趣があり、それにひかれて集るといっても、そんな曖昧あいまいなことに満足しない。浅草が時代の移り変りによって、古きを捨て、新らしきにつき、変貌してゆくのは当然であろう。

私は震災の時も、戦災の時も、浅草の土地と共に苦難の道をへて来た。そのためか、今日の浅草の姿を目の前にしながらも、常に古い浅草の亡霊にとりつかれている。漫然と歩きながらも、かつての浅草が二重うつしのようにつきまとっている。

昔の浅草といっても、私にはあまり遠くない。さてどこから入ったらよいものか。まず十二階

近辺や瓢箪油や六区の興行街は、かつての浅草特有の情景といつてよいであろう。

その頃の興行街には、今日ではみられないルナパークがあり、三館共通があり、花屋敷があり、オペラがあり、江川の玉のりがあり、いちいちの思い出は深い。

十二階には幾度かのぼったことがある。一番てっぺんにあがって、望遠鏡を手に遠くの景色を覗いていれば、自ずと足元がゆらゆらと揺れているような氣に誘い込まれていった。螺旋状の階段をのぼり、途中赤毛氈の縁台に腰かけ、あつぽつたい湯吞茶碗で甘酒をのんだ。何階目かにまでのぼり、真下にあつた淫売窟を覗けば、二階の部屋で遊んでいる様子が見られると、当時噂しあつていた。

この淫売窟は狭い曲りくねった路地が続き、両側の向き合つた小さな窓から女達が、チュウチュウと鼠の鳴き声そっくりに客を呼んでいた。明治生れなら知つていよう。それも震災後は玉の井や亀戸に散ってしまった。

震災の時十二階は、八階目あたりでぽつきり折れた。その後焼けあと整理の時、軍隊の手によつて爆破されたが、合図のラッパの響きが、今もなお耳底に残っている。

六区の興行街にあつた三館共通とは、一枚の入場券で自由に映画やオペラや芝居が見られ、一日中面白くすくすくすることが出来た。私はオペラはなやかな頃、松竹座や金龍館に出かけ、かぶりつきの所で舞台の埃を浴びながらよく見ていた。そこに立っていれば、舞台横から吹き抜ける

風にのって、一種異様な匂いが流れて来た。

六区の両側にたち並んだ小屋は、震災の時も、戦災の時も、あまり焼けおちていない。今日一応外観だけは新らしくこらしてあるが、どこか古ぼけた感じが残り、これといって目新しい小屋もたっていない。この頃の修学旅行シーズンともなれば、彼等が六区の石畳を整理して通るのを見かけるが、先生も生徒も、映画館やストリップの小屋にかかげた女の裸体姿や煽情的なきわどい大きな絵看板をまさか立ち止まって見るわけにもいかず、横目でチラチラッと見て行く。先生としてもこればかりは説明がつけにくいであろう。

埋められた瓢箪池のあとには東宝劇場や新世界がたった。かつての池を知っている者には、四季を通じたあたりの風情が格別懐しい。池の中央にかかった石橋には藤棚がつてあり、休憩所には鯉にやるまるい麩あなを売っていた。お粗末だが、噴水もあった。私は一段と低くなった映画館の客席に腰かけている時とか、新世界の地下にある浴場に入っている時とかには、身近に大きな緋鯉がむらがつて泳ぎまわり、尻をつつかれてるような気がして来る。当時瓢箪池のふちはいつも場所柄がらでみで汚れていた。映画のプログラム、煙草の吸殻、南京豆や蜜柑の皮、それに茄卵かでの皮などが、池の水にひたっていた。新世界の高い建物のまわりが、色とりどりの電イルミネーション飾に輝いた時は、新らしい浅草の一つの眺めといえよう。それも周囲が暗くなってからよりは、暮れかかる夕闇のうちに屋上の五重塔をかたどった無数の電飾を家並の間に仰ぐ時、一段と美しい。

国際劇場は戦災の時、屋根が焼け落ちた。戦後大きな建物はあまり外観は変らずに復興した。この頃はバスにのった地方の見物客が、車を止めて覗いてゆく。劇場の正面入口には、ひと組になった団体客が整列してよく記念写真をとっている。この人達はまた新世界にも出かけてゆく。最近では自家用車で乗りつける外人の家族連れの客が、目立って来た。

国際劇場と田原町の地下鉄を結ぶ道路は、他とはちよっとおもむきをことにしている。昔ながらの埼玉屋とか、騎西屋とか、今半とかの古い暖簾が風にたなびいている。それにまた、昔懐しいだいふくや三角の豆もちやおこわのお握りを売る店が、二、三軒ある。その店さきにはとろてんに使う寒天が水に浮いている。かと思うと、砥石や神興専門の店や朝鮮料理や蛇料理の店もある。ずっと田原町よりには海苔巻きや稲荷寿司を売っている店があり、あけひろげた店さきでは、若い女が手さばきもあざやかに大きな鉄板の上で焼きそばをつくっている。こういうと古びて淋しい通りに思われるが、浅草のうちでは人通りがはげしく賑わっている。田原町で地下鉄をおりた国際劇場目当の客は、子供の前に浅草は人柄が悪いと説明し、横目で見ただけで帰ってゆく。浅草になじむことの出来ない人種であろう。

国際通りから曲った合羽橋の狭い通りには、戦前看板娘をおいた小さな焼き鳥屋があった。薄汚ない店であったが、隅のテーブルで高村光太郎さんは、あの大きな手に盃を持ち、静かに一人のんでいた。看板娘といえ、そういう店は今日なくなった。戦前には仲見世の裏あたりに日本

髪を結った小料理屋の姉妹が客をとりもち、評判をとっていた。また地下鉄通りの喫茶店でも器量自慢の娘が、客のお相手をしていた。今日それだけでは、客が呼べなくなったらしい。

瓢箪池から一段と高くなつたものと水族館や木馬館があつた裏側の広場には、戦後間もなくのこと、泥棒市がたつた。つまりその頃は自転車泥棒が横行していたが、盗まれたと気づいたら、すぐその足でこの広場へ来てさがす。と、そこで自分のところの自転車が売りに出されている。相手が相手であつたことは口に出せず、仕方なく買い戻していた。また、観音堂の横には古着専門の屋台が出ていて、自分の盗まれた衣類が、店頭によくぶらさがっていた。物に不自由していた頃の出来ごとである。

瓢箪池の周囲には、その頃小屋がけの安直あんちよくな喰べ物屋やのみ屋が、ずらりと並んでいた。そして六区の交番の傍には、「炒りたてのおやらかい豆」とうたって、夜店が出ていた。子供の頃三角の紙袋に入つた豆を歩きながら喰べたり、映画を見ながらつまんだりしていた。それから石橋の袂では、蛸の串焼きを売っていた。若い女がきまり悪そうに池のふちにしゃがみ、頬ばっている姿を見かけた。

現在でも新世界の裏手からもとの池のふちに沿うて、安直な小屋がけで、煮込みとか、おでんとか、焼き鳥とかのみ屋がかぎの手に並んでいる。どの店も若く威勢のよい女をおき、酔客と一緒にはいしゃいだり、うたつたりしている。そこへギターや三味線を抱えた門付けが流して来る。

こんなところに古い浅草の面影が、現在もなお生きている。

屋台店といえ、田原町から雷門までの広小路には、隙すきもないほど、うなぎ、天ふら、焼き鳥、おでん、牛めし、寿司等の店がずらりと並び、夜の風物詩をなしていた。いずれもたねを吟味し腕をきそっている。遠くから好んで食通が喰べに来る。往来に尻をとび出し、首だけ暖簾のれんにつつまみ、牛めしの丼を抱えている。目の前で好きなたねを握らせたり、あげさせたりして盃をかたむけている。と、足もとにはひとときれ投げてくれるのを野良犬が待っている。今日では浅草名物の一つともいえた広小路の屋台店は、すでに影を消してしまった。この電車通りは人通りもはげしく、どこの店も近代的な建築をきそい、繁盛をきわめている。

それに反して向い側の道路は人通りが少なく、ぐっと淋しい。雷門によった所に戦後そのままの乾物屋がある。庇ひさしが低く、間口が広く、どこか都心をはなれた駅の近くにでもありそうな店つきである。この主人は大の久保田万太郎最良びいきである。単に愛読者というよりは、実に精通していて、どの作品はいつどこに発表されていたかをよく調べ、よく知っている。久保田さんと同じ下町育ちで、年輩もほぼ同じぐらいにみえる。なんでも若い頃お互いに俳句をつくり、批評し合った仲であるという。この店のさきに腰かけ、電車通り一つをへだてた向う側を見ていけば、まるで明るく賑やかな夜景の舞台を覗いているような気がして来る。そして話好きで土地っ子の主人から、浅草の浮き沈みのはげしさを聞くともなく聞いていけば、いつか時のたつのを忘れてし

まう。

仲見世は震災の時には焼けなかったが、震災の時はすっかり火をかぶり、建物の周囲のコンクリートだけが焼け残った。今日ではこれまでなかった雷門が新らしく出来、宝蔵門もごと完成した。ここで震災前から今日まで、少しも変らないのは、いつも人の足裏に踏み付けられている敷石ぐらいのものである。両側にたち並んだ商店は、見かけのはなやかさに似ず、暖簾はそのままでも、たえず主人は入れかわり、たちかわりして経営の難しさを語っているという。

観音堂を正面にして右へ行けば二天門へ出、左に行けば六区の興行街に出る。なお境内にあった五重塔は戦災に焼失し、そのままになっている。二天門のわきには昔からの消防署があり、この辺一带はこれといって特色のない町であったが、近年周辺の様相はがらりと変った。つまり広い駐車場が出来て、毎日何百台というバスが地方からの団体客を送り込んで来る。バスの案内嬢に引卒されてお堂に参詣する。この人達は素通り同様にあまり土地にお金をおとしてゆかない。近辺には団体客目当ての土産物の売店や食堂が軒をつらねている。

お堂と六角堂を結ぶ真中あたりにその昔水族館があり、裏手にまわれば花屋敷があった。他では味わうことの出来ない遊び場で、主に家族連れお客が多かった。花屋敷には子供の喜ぶ音がかり、大きな池があった。たくさんの動物を飼い、猿芝居やあやつり人形がかかっていた。木馬館というのは、子供が耳やしっぽのとれた木馬にまたがり、楽隊の音につれてくるくるまわり出

す。それを親はかたわらのベンチにかけて見物している。馬上の子供が目の前にまわって来るたびに紙の旗を振って喜び合い、のどかな遊び場であった。その隣りが水族館になっていた。当時は魚の種類も多かったが、だんだん数が少なくなり、さびれていった。それとは逆に二階の演芸場はさかえていた。殊にカジノ・フォリーが旗上げした頃は、下町とは縁の薄い山の手の人達がよく見物に出かけて来た。階上の狭い舞台では踊り子達がうたったり、踊ったりしている。その階下ではかなりくたびれた魚が狭い所を泳ぎまわっている。この上と下のとり合わせは、浅草らしく、佻しい風情であった。

カジノ・フォリーといえば、当時よく川端康成さんと楽屋をおとずれた。狭い部屋に踊り子達は、舞台にみられない無邪気さで潑刺としていた。戦後一度だけ六区のストリップの楽屋へいったことがあるが、かつてみられたわかわかしい楽屋風景はなく、舞台衣裳の踊り子がラーメンを抱えている図は、どこかさむぎむとしていた。

すでに木馬館や水族館は姿を消し、今日映画や漫才、落語、浪曲等をかける演芸場になっている。その横には関西ストリップと銘打って新らしく奥山劇場が出来た。

観音堂の東側には三社さまの社殿と被官稻荷が戦災に焼けないで残っている。そして西側には針供養の淡島さまが、これも焼けないで残り、いずれも戦前の面影をやどしている。お堂裏の広場には、戦災で火をかぶったが、毎年新芽をふき、今日では生茂った銀杏の大木が幾本も空にそ